



**転生前のチュートリアルで  
異世界最強になりました。4  
準備し過ぎて第二の人生は  
イージーモードです！**

ALPHAPOLIS

**小川悟**  
*Ogawa Satoru*

# CONTENTS

番外編



281

本編

ロンダの改革と旅立ち



007

I became the strongest in another world  
in the tutorial during my lifetime.



## バルドー

ドロテアの元冒険者仲間。  
しっかりしているが、  
キケンな趣味を  
持っている……？

## ドロテア

ロンダの魔術師ギルドの  
ギルマス。  
おまん  
妖艶だけどボンコツ？

## シル

テンマのじゅうま従魔である、  
シルバーウルフの子供。  
食いしん坊&甘えん坊。

## ハル

食いしん坊な  
ピクシードラゴン。  
現代日本の知識を持つが、  
感性は古め。

## ジジ

人族の少女。  
泣き虫で不器用だが  
おまん  
頑張り屋。

## アーリン

べんきやう  
辺境の町・ロンダの  
領主の娘。  
魔術師としての  
才能を秘めている。

## テンマ

33歳で命を落とし、  
異世界に転生することになった  
元ゲーマー。  
ゲームの知識で  
この世界を楽しみ尽くす。

登場人物紹介



本  
編

ロンダの改革と旅立ち

I became the strongest in another world  
in the tutorial during my lifetime.

## 第1話 ある密談

「皆さんお集まりいただきありがとうございます」  
俺、テンマは努めて堅苦しく挨拶をした。

ここは冒険者ギルドの会議室。

集まってくれたのはロンダの領主でありアーリンの父親でもあるアルベルトさんに、騎士団長のバロールさん、そして冒険者ギルドのギルドマスターであるザンベルトさんだ。彼らは実質的に辺境の町、ロンダを仕切っている三人でもある。

そんな三人に対して、俺はある相談をしなければならぬ。

悠々自適な生活を送れると思っていたのに、まさかこんなことになるだなんて……。  
そう心の中で嘆きながら、俺はこれまでの日々を振り返る。

日本で三十三歳のときに命を落とした俺は、十四歳の少年の姿で異世界に転生させられた。  
転生先で簡単に死なないように三ヶ月の研修を受けなくてはならない、と神に言われていたのだが……蓋を開けてみればそれが終わったのはなんと十五年後。  
しかし、その中で前世のゲーム知識を活かして工夫を続けていたから、俺のステータスは完全にチートじみた数値になったのである。  
そんな研修を終え、俺が放り出されたのは、テラスという名前の世界にある辺鄙な村・開拓村の付近だった。

開拓村に身を寄せ、一ヶ月半くらいのおんびりした生活を送っていた俺だったが、村に住む狐獣人の美少女・ミーシャに流される形で村を出て、冒険者として活動することに。  
そうしてまず立ち寄ったのがここ、ロンダ。

ここに来てから大変なことも少なからずあったが、いいこともたくさんあった。

その中でも喜ばしいのは、仲間が増えたことだ。

人間族と免獣人のハーフであるジジとビビ姉妹。国の中でも指折りの魔術師で、ロンダの魔術ギルドのギルドマスターを務めている上に英雄とまで呼ばれるドロテアさん。そしてロンダの領主であるアルベルトさんの娘のアーリン。

大変なこともあるが、彼女達に出会ってから生活は賑やかになったと感じる。

先日はドロテアさんとアーリンの誕生日があつて、それにあやかつて俺らもご馳走を食

べたり女性陣をオシヤレさせたりと楽しませてもらったしな。

だが、賑やかなのがいいとは言ったって、限度はある。

そう、それが今回アルベルトさん、パロールさん、ザンベルトさんを呼び出した理由なのだ。

「テンマ君、どうしたんだい？ 重要な話があると聞いたけど？」

ザンベルトさんはそう質問してきた。

ドロテアさんとアリンの誕生会に駆けつけた貴族や商人がようやく帰途につき、冒険者ギルドの忙しさも一段落したからだろう。その口調はどこか気が抜けているかのようだ。パロールさんも、同じく忙しさから解放されたからか、気軽な感じで言う。

「テンマ君、なんだか喋り方も少し堅苦しくないかい？ 今更我々に気を遣う必要はないし、気軽に話してくれた方が我々も嬉しいよ」

「その通りだ。身分に関係なく、いち友人として話してくれ。もつとも、そういう意味で言ったらテンマ君はあのドロテア伯母上と仲がいいから、私の方が気を遣わないといけないのかもしれないがね。ハハハハハ！」

アルベルトさんも同じか……。

彼らは、今起きている由々しき事態について、何も気付いていないみたいだな。

ドンッ！

俺は会議室の机に拳を振り下ろし、三人を順番に睨みつける。

三人は音に驚いて体を震わせ、次いで睨まれていることに気付いて唾を呑む。

俺は、殊更丁寧に尋ねる。

「皆さんは、最近奥さんと会われていますか？」

「おつ、そう言えば最近見ていないなあ」

パロールさんはそう気軽に返答したが、ザンベルトさんとアルベルトさんはバツの悪そうな表情になる。

少しして、ザンベルトさんがももごと答える。

「あ、姉上の屋敷に行っていると聞いていたが……」

「おつ、そうなのか？ だったらうちの嫁も姉上のところに行っているのかあ」

パロールさんは相変わらず通常運転だ。

奥さんのスケジュールを把握するつもりがないなんて……こんなんで夫婦生活は上手くいつているのか？

いや、そのせいで他人に迷惑がかかっているというのに、無関心なことの方に腹が立つ。こめかみがピクピクするのが自分でも分かる。

そして残る一人——アルベルトさんは無言で俯いた。

俺は口を開く。

「皆さんの奥様達は、私のどこでも自宅に滞在されていますよ」

「どこでも自宅？」

「そういえば彼らは空間ごと複製出来る空間魔術——ディメンションエリアを用いて生成したどこでも研修施設——D研に来たことはないし、その存在について話したこともなかった。」

……っというか奥さん達は、旦那に何も話していないのか？

これまであまりD研に関しては口外しないようにしていたが、これほどその存在が広まってしまった上に彼らの奥様方が入り浸っているとすれば隠す理由もない。

面倒だと思いつつも、俺は順を追って説明することにした。

「俺は空間魔術スキルでD研という名の亜空間を作りました。俺達は普段そこで暮らしているんです。その入り口は今、ドロテアさんの屋敷の中にあります」

「空間魔術スキル!?」

耳馴染みのないスキルに驚くのは分かるが、今はそんな場合じゃねえ！

とは思うものの、それに関しても詳しく話しておかないと、話が進まなそうだ。

「ええ。最初はその中に仮設住宅を作ってそこに住んでいたのですが、最近ようやくD研の中に自宅……どこでも自宅が建ちました。時に、ザンベルトさんの奥様は商業ギルドで

働いていたときに、契約魔法を使っていましたよね？」

「ああ、それはそうだな……」

ザンベルトさん、顔色が悪いですよ。

以前自宅に奥様方がやってきたせいで俺が追い出されたことは伝えていたから、そこから更に事態が悪化していそうだと察して、思考を巡らせているのだろう。

俺は続ける。

「俺は契約魔法を使ってご家族以外に情報を漏らさなければ、どこでも自宅にいらしてもいいですよとお伝えしました。ですが、奥様方は契約を結んだのをいいことに、ずっとうちに滞在しているんですよ。気付いていませんか？」

「そんなことになっているのか!?」

三人は口を揃えてそう言った。

おっ、やっとバロールさんもこの重大さを理解しようだな。

少し嫌味っぽい口調で、俺は言う。

「いや、どこでも自宅が実質女性陣に占拠されているような状態でしてねえ。自分の家なのに、居心地の悪いこと、悪いこと。今では誰の家なのか分かりませ〜ん」

「……」

三人は俯いて目を合わせない。

まあ、そうなるよね。

「とはいえ、皆さんが何かしたわけでもありません」

そこで言葉を区切り、俺は再び三人を見る。

三人は自分達が責められるわけではないと思ひ、ホツとして顔を上げていた。

やっぱりことの重大さを分かっているんじゃないか！ 妻の問題は夫の責任でもあるだろうに！

そんな気持ちを込めてもう一度三人を睨むと、彼らは固まった。

俺は続ける。

「ミーシャやジジ、ピジも楽しそうに過ごしているので、少しなら目を瞑ります。ただ、ここまで長い期間どこでも自宅に入り浸られると、困ってしまうのです」

三人は、コクコクと首を縦に振っている。

そんな彼らには、俺は人差し指を突きつけ、告げる。

「そこで三人には、奥様とドロテアさんの行動を管理してもらいます！」

それを聞いて真っ先に反応したのは、ザンベルトさんだった。

「ちょ、ちょっと待ってくれ！ テンマ君の気持ちは理解出来るし、可能な限り協力はしたいと思っている。だが、妻達はおっかないし……それに、ドロテア姉上が関わっているとなると、力になれるとは言い切れないな……」

アルベルトさんもそれに同意する。

「そ、その通りだ。テンマ君には申し訳ないが、妻や娘、伯母上と相對するくらいなら、いつそのこと……」

いっそのこと、なんなんだ!? 何かとんでもない決断をするつもりなのか!?

そう思いながらパロールさんの返答を待つが……。

「……」

状況を理解したらしたので、発言しなくなるってどういうことだよ！

前世でも、女性が家庭を仕切っている家は多かったような気はする。

だが、この世界では女性が権力を持つ傾向がより顕著だ。

最初はロンダの男達が、高名な魔術師であるドロテアさんに対して頭が上がらないだけかと思っていたのだが、そうではないようだ。

今回の件もそうだし、開拓村で世話になった家では、大黒柱であるランガの妻であり、ミーシャの姉でもあるサーシャさんが家の権力を握っていた。

ランガの冒険者仲間であるグストだって、ルカさんの尻に敷かれていたし。

創造神テラス様が女性であることも、影響しているのかな？

ともあれ、俺もこれまでの暮らしの中で、女性を向こうに回すと大変なことは理解している。

これ以上彼らを追い詰めても無理そうなので、代案を出すことにした。「分かりました。それでは、皆さんに奥様やドロテアさんをどうにかしてもらおうのは諦めましょう」

三人が大層ホッとしているのが分かる。

しかし、安心してもらうにはまだ早い。

俺は続ける。

「ただ、皆さんには、快適な邸宅を作るお手伝いをしていただきます」

「「????」」

三人は揃って首を傾げた。

確かに、これだけで理解しろっていうのは無理な話か。

「アルベルトさん、誕生日祝いでお客さんが滞在した迎賓館を、これから使う予定はありますか？」

「いや、しばらく使う予定はないし、今は閉めている」

「そこを私の好きなように改修させてください。まあ、改修というより建て替えの方が正しいかもしれませんが。それに加え、周りの使われていない土地も提供していただけませんか？ それらを使って、奥様方が利用出来る施設を造りたいのです」

どこでも自宅並みに快適な環境を用意すれば、奥様方やドロテアさんもずっと居座る意

味がなくなるだろう。

そう、住み良い邸宅を用意しようと考えた目的は、俺がそこに住むことではなく、どこでも自宅を奪還することにあるのだ。

「「!!!」」

三人は絶句した。

俺は畳みかけるように言う。

「よろしいですね？」

「えっ、いや、しかし、でも……し、仕方ないのか……」

アルベルトさんは混乱しているようだが、前向きに考えてくれていている様子。

しかし、バロールさんが抗議してくる。

「ま、待ってくれ、周りの空き地は騎士団の訓練で使うんだ」

俺は人差し指をピッと立てる。

「それでは、騎士団を私が鍛えてあげましょう。今の騎士団は弱すぎますから。最初は広い場所を訓練する必要はありませんし、これで問題は解決です」

「なっ！」

バロールさんは目を見開いている。

まさか俺が騎士団に関わろうとすると、夢にも思わなかったのだろう。

俺はかつて自分が受けた十五年もの研修の知識を下敷きに、独自の育成システム——テナマ式研修を生み出し、仲間達に受けさせてきた。

しかし、これまではあまりロンダの人々にそういった知識をひけらかしてこなかったからな。

転生した当初は、貴族を始めとした権力者とは距離を置きたいと考えていた。

でも、気付けばドロテアさんや今日の前にいる三人を始めとした、町の権力者達と近い関係になってしまっていた。

それならばいつそのことロンダの町ごと、研修都市にしてしまおうと考えたのだ。

先日、この世界を管理する神であるテラス様に会った際、世界を滅ぼすなどは言われたが発展させるなどは言われなかったから、許されるだろうという判断だ。

「ふふふっ、ドーピングも使って徹底的に鍛えてあげましょう！」

ニヤニヤ笑いながらそう口にする、なぜか三人の顔色が真っ青になる。

やがて、ザンベルトさんが口を開く。

「テ、テナマ君、ドーピング？ とはなんだい？」

俺は説明する。

「ひたすら訓練して限界まで体力を使い切り、特製ポーションで強制的に回復させるというのを繰り返すんですよ。何度も限界まで訓練することで、これまでとは比較にならない

ほど能力が向上しますよ。ああ、それに毒薬や麻痺薬を呑んだ状態で訓練すると、より能力が育ちやすくなりますし、状態異常に対する耐性をつけることも出来ます。その代わりにお腹はちやばちやばになりますし、食事も食べられなくなりますけどね！ アハハ！」

俺の説明を聞いて、三人の顔色は益々悪くなってしまった。

アルベルトさんが尋ねてくる。

「そ、それは危険じゃないのか？」

「えっ、アーリンもドーピング、やってますよ」

「！！！！」

三人が再び絶句した。

アルベルトさんは少し涙ぐんでるようにすら見えるが、まあ気のせいだろう。

俺は咳払いして、再度訴える。

「騎士団が強くなれば町の治安は良くなるし、魔物にも対処出来るようになります。領に

とっては良いこと尽くめです。そして俺が協力するのは、軍事力の強化だけではありません

なぜか疑いの視線を向けられている気がするが、気にしない、気にしない！

さあ、この世界に干渉し始めるぞ！

なぜか疑いの視線を向けられている気がするが、気にしない、気にしない！

さあ、この世界に干渉し始めるぞ！

なぜか疑いの視線を向けられている気がするが、気にしない、気にしない！

さあ、この世界に干渉し始めるぞ！

## 第2話 ヒクシードブゴン

アルベルトさん、バロールさん、ザンベルトさんとの話し合いを終え、俺は冒険者ギルドを後にした。

更にロンダの町を出て、森を歩きながら考える。

話し合いの首尾は上々だったな。結局あの後三人はどうか納得してくれたし。

なんとかなってよかった。

とはいえ、実はそれほど女性陣がどこでも自宅を占領していることに怒っているわけではない。

女性とのコミュニケーション能力が低いのは自覚しているし、今更簡単に性格を変えられないから、俺にだって原因はあるのだろう。

本来であれば何が起きているのかを直接聞いた上で解決に向けて動くべきだったというの、分かっている。しかし、この間俺がみんなの洋服を作っている最中に遊んで待つ

ていたことに対してしっかりと怒ってしまったので、これ以上がみか言うのもなあと気が引けてしまったのだ。

まあ引き籠り体質の俺の望みとしては、ゆっくりするための空間が必要だというだけである。

それならなるべく争わない方法で解決しよう、という意図があった。

とはいえ、施設を作るためには石材や木材が大量に必要だ。

三人にそこまで工面してもらおうとなるとさすがに可哀想な気がしたので、素材はこちらで集めると提案した。

そんなわけで俺は素材を採取するべく、フライの魔法を発動し、飛び立った。

しばらくすると、前方に大きな山が見えてきた。

早速山の中腹の岩場に降りる。

まず魔法で岩を必要な大きさのブロックに切り分け、アイテムボックスに次々と収納していく。

そんなことをしていると、ワイバーンが襲ってきた。

風魔術のウインドカッターで首を切り落として、収納する。

ここら辺はワイバーンの住処になっていらく、それから何度かワイバーンが襲つ

できた。  
それらを難なく倒していると、しばらくして二十匹以上のワイバーンの集団がやってくる。

中には二回りも大きい、上位種まで交じっているではないか。

最早ここまで大きいと、ドラゴンとすら呼べてしまいそうだ。

とはいえ、それでも俺の敵ではない。

これまで同様に、すべてのワイバーンの首をウインドカッターで落としてやった。

それを機に襲ってくる魔物がいなくなったので、岩の切り出しに集中出来るようになった。

結局、必要としている量の十倍以上の石材が集まったので、大満足である。

さて、次は木材を採取するか。

山を飛び立つてからすぐに、巨大な杉の森を発見した。

森の入口に降り立ち、辺りの木を観察してみる。

幹の直径は三十メートル以上あり、樹高は百メートルくらいはあるだろうか。

再度フライで上空へ飛び、森を上から見ると、森の中心部にはもっと立派な木が生えていることが分かる。

これだけ大きな木が、森の中では比較的小さいのだと知り、驚く。

とはいえ、あまりにも大きな木を採取しても扱いに困るので、俺は森の入口に戻る。

改めて先ほど見上げた木を見て、悩む。

素材としては申し分ないが、徒に木を切つてしまえば森自体を殺すことに繋がってしまう。

そう思い、周囲を見回すと、どうやらこの森はそもそも間伐されていなく、所々倒れていたりと、發育不足になっていたりする木があるではないか。

まず倒木を収納し、余分な木をウインドカッターで伐採しようとしたが……切れなかった。

というわけで、より切断力の強い水魔術のウォーターカッターを使い、どうにか切り倒した。

そんなことを繰り返し、五本ほど収納し終えたタイミングで、突然斜め前から光の塊が飛んできた。

魔法による攻撃かと思い、慌ててそれを避ける。

しかし、光の塊は勢いよく方向転換し、再度襲ってきた。

それも躲したが、またしても光の塊は俺に迫る。

この光の塊の正体を見極めないことには、埒が明かないな……。

そう思い、集中して光の塊をよく見ると……妖精とゆるキャラの中間のような姿をした何かが、翼を広げ、体を光らせて体当たりしてきているのだと分かる。

どこかで見たことある気がするな……えーつと確か……こいつ、ピクシードラゴンじゃないか!?

念のため鑑定してみると——当たりだ。

体を宝石のように硬くして高速で体当たりしてくる魔物だと、研修施設の図書室にあった魔物図鑑では説明されていた。

読んだときは人形やフィギュアぐらいの大きさかと思っていたが、小型犬ぐらいの大きさだな。

そう考えている間にもピクシードラゴンは体当たりを敢行してくる。

しかし、初撃はまだしも、体当たりの速度に慣れた今、避けるのは特に難しくないとはいえ何度も躲し続けるのは面倒だな。

そう思った俺は、体当たりを避けながらピクシードラゴンを両手で掴む。

……よし、捕獲出来た。

光ってはいるが、熱を持っているわけではないんだな。

ピクシードラゴンはじたばたと暴れながら——

『放しなさい、人間のクセに生意気よ!』

えっつ、えええっ!

逃げ出そうと手の中で暴れるピクシードラゴンが念話を使ってきたので、俺は驚いてしまっ。

『えーと、会話出来るのかな?』

俺がそう念話で返すと、ピクシードラゴンは暴れるのを止め、俺の目を見て言う。

『あら、念話ができるのね。それにしても、レディーを乱暴に扱うのは失礼よ』

確かにそうかもしれないが……レディーって誰のこと?

『でも、放したらまた体当たりしてくるだろ?』

『だって、私の森の木を勝手に切ったじゃない!』

ああ、この森には所有者がいたのか。それは俺が悪い。

頭を下げる。

『それはすまない。まさかこの森が誰かのものだとは思わなかったんだ』

『謝って済む問題じゃないわ!』

『それはそうかもしれないけど……じゃあ、どうすれば良いかな?』

『死んで詫びなさい!』

さすがにそれは厳しすぎるだろ……。

俺は顔を擧げる。

『さすがに死ぬのは勘弁かな。そのつもりで攻撃してくるなら、反撃するしかないよ』  
 『開き直るの!? これだから人族は信用出来ないのよ!』

そう言うお前は、ドラゴンのクセに随分人間臭い反応をするよな……。  
 とは思うが、一旦それは呑み込み、言う。

『ごめん、さすがに死にたくない。そうなると君のことをキュッと殺すしかないよね』  
 『ま、待ちなさいよ! 私は人族を救った勇者タケルと一緒に魔王を倒した英雄なのよ!』  
 俺は首を傾げる。

『それって誰? 有名人?』

『はあああああ!?! 世界を救った勇者のことを忘れるなんて! これだから人族は!』  
 世界を救った? いつの話? みんな知ってるの?

ぶっちゃけ俺は最近転生してきたので、そういつたこの世界の常識に疎いところがある。  
 とはいえ、なんだかそれをこうも強く言われると不快だな……。

『うん、知らない。そんなことより、死にたくないから——』

声から不機嫌さを感じ取ったのか、ピクシードラゴンは俺の言葉を遮るように言う。

『待ちなさい! そ、それなら、美味しい物を食べさせてくれたら、ゆ、許してあげる  
 わ!』

そんなことで許してくれるのかよ!?

『本当だろうね? 手を放しても攻撃しない?』

驚くほど目が泳いでる。

人間臭い反応だなあ。

そう思いながらも、俺は声を低める。

『もし、攻撃してきたら、プチャツとしちゃうよ』

『し、しないわよ!』

怪しいが、これ以上追及しても無意味なので、話を進めることにしよう。

『それで、何が食べたいのかな?』

『そうね、唐揚げにポテトチップス、プリンも食べたいわ。それ以外はダメよ。用意出来  
 なければ……死んで詫びなさい!』

得意気に言うピクシードラゴンを見て、『なんでそんな食べ物を知っているんだ?』と  
 首を傾げる俺。

唐揚げはこの世界にあっても不思議ではないけど、ポテトチップスとプリンはいくらな  
 んでも現代的すぎるだろ!

もしかして勇者タケルって、転生者なのか?

そんなふうには驚く俺を見て、困っていると思っただろう。

ピクシードラゴンは『プフフ、用意出来るかしら?』なんて言いながら、ほくそ笑んで

いる。

俺は、飄々と言う。

『用意出来るよ。ホロホロ鳥の唐揚げで良いかな?』

『えっ、用意出来るの。本当に? まさかプリンも!?』

おお、驚きより喜びが勝ったのか。

目がキラキラしている。

『あ〜でも……』

『何、出来ないの? 期待させておいて用意出来ないって言うの!?』

俺は少し溜めて、言う。

『プリンは、砂糖じゃなくてハニービーの蜂蜜を使った奴しか作れないんだよね』

『ハ、ハニービーの蜂蜜!?』

ピクシードラゴンの言葉に、頷く。

『生憎、砂糖は見つけられていなくてね。だけど、ハニービーの蜂蜜を使ったプリンは絶品だ。蜂蜜のあま〜い香りが、口の中で広がる感じが最高なんだよ』

ピクシードラゴンさんや、涎が手に垂れてますがな。

慌てて涎を拭いてから、ピクシードラゴンはそっぽを向く。

『し、仕方がないわね。そ、それで我慢してあげるわ!』

そう言ってピクシードラゴンは光るのをやめた。

光が収まると、体の色がピンクだと分かる。

手を放すと、その場で……羽ばたくことなく浮いているだと!?

フライミたいな魔法を使っているのかな?

そしてピクシードラゴンは約束通り攻撃してくることはなく……というより、涎を垂らしながら催促するような目でこちらを見てくる。

俺がルームを開くと、ピクシードラゴンは当然のように肩に乗ってきた。

ルームは、自分専用の亜空間を生み出すことが出来る生活魔法の一種だ。

その中にはこれまで得た物資をため込んでいる他、居住スペースもある。

俺に触れている状態でない他、他の人はルームに入れない仕様になっているのだが、それ

を知っているということだろうか……。

そう考えていると、ピクシードラゴンは偉そうに言う。

『あら、ルームが使えるのね』

むしろこちらからすると、なぜピクシードラゴンがルームを知っているのかと問いたい

ところだが、それより気になることがある。

肩に涎が付いて不快なのだ。

いち早く肩の上から退いてもらうために、俺は足早にダイニングに向かう。

そして、収納空間からテーブルの上にはホロホロ鳥の唐揚げを出してやる。ピクシードラゴンは肩から飛び降りてテーブルに座り、ジッと俺を見てきた。

……待てをしてるのか？

しかし、食べるように促しても、こちらを見てくるのみだ。

これまでの人間らしい振る舞いから『もしかして……』と思ひ、フォークを出してみる。すると、ピクシードラゴンはフォークを俺から奪うように掴み、唐揚げを食べ始めた。待てじゃなくて、フォークを待っていたのか……。

あまりの人間臭さに驚きながらフライドポテトやスープ、パン、そしてスプーンやナイフ、マヨネーズやケチャップなんかも出してやった。

ピクシードラゴンは、やはり普通に食器を使いながら食事する。

驚きながらも果物のジュースやブルーカウのミルクが入った瓶と、コップを出す。すると、飲み物もしっかりコップに注いだ上で飲んでいないか。

中に人間が入っている着ぐるみ？

もちろんそんなことはないはずだが、そう思ってしまうくらい人間みたいな奴だ。

結局、三回も唐揚げをお代わりして、ピクシードラゴンはやっと満足した。

ただ、お目当てのデザートは別腹らしい。

食事が終わったのを見計らってプリンを出してやると、あつという間に平らげ、お代わ

りをしてきた。

結局それも一回では終わらず……結局お代わりの回数は五回。

しかも、ピクシードラゴンはそれでもまだ食べることをやめない。

リビングに移動してポテトチップスを出してやると、ピクシードラゴンはソファに座り、嬉しそうにつまみ始めた。

驚くべき食欲だな……。

### 第3話 苦渋の決断

折角なのでピクシードラゴンに色々話を聞きたい。

勇者のこともだし、なぜプリンを知っているのかも気になる。

どう切り出そうか悩みつづ、ピクシードラゴンの横に腰を下ろすと――

『ねえ、あなた。名前は？』

俺が質問するよりも先に質問してきた。

言われてみれば、お互い名乗っていないかったな。

『俺はテンマだ』

『テンマか、ふ〜ん』

ふ〜んって！ 普通人に名前を聞いたら、その後に自分も名前を名乗るものだろうが！  
絶句する俺の前に、ピクシードラゴンは質問してくる。

『ねえテンマ、最近の一族はプリンとかポテトチップスとかを、普通に食べているの？』  
え、マジで名乗らない感じ？

そう思って固まる俺に対して、ピクシードラゴンは苛ついたように言う。

『ねえ、質問してるでしょ。答えなさいよ！』

『なあ、相手に名前を聞いたって、自分は名乗らないのか？』

『えっ』

ピクシードラゴンは、固まった。

俺は重ねて問う。

『名前のない種族なのか？ それとも名乗れない理由でもあるのか？』

『あっ！』

『俺は約束を守ったし、木を切ったことはチャラだろ？ これから用事もあるし、相手に名前を聞いておいて自分は名乗らないで怒鳴るような失礼な奴に割く時間なんてないんだ。』



もう帰ってくれ!」

そう言うってから立ち上がると、ピクシードラゴンが服の裾を掴んでくる。

「ハルでしゅ!」

えっ、ハルデシユさん? まさか囁んだ!?

俺はニヤニヤしながら聞き返す。

「ハルデシユさんですか、ハルさんですか?」

体が濃いピンク色になった。

照れてる? 怒ってる?

そう思って返答を待っていると、ピクシードラゴンは勢い込んで言う。

「ハルよ! 名乗るのが久し振りだったから、囁んじゃっただけじゃない!」

怒っているようなセリフだが、声に照れが見えるな。

俺はニヤニヤしながらそう分析しつつ、右手を差し出す。

「よろしくな、ハル!」

するとピクシードラゴン——もといハルの体が、少し赤みがる。

「ちよっ、ちよっとお、年上のレディーに向かって呼び捨ては失礼よ!」

「うーん、確かに三千歳以上年上の相手だから失礼のかな? でも種族も違うし、可愛らしいから呼び捨ての方が——」

ハルは、少し嬉しそうに体を揺らす。

「可愛らしいって……てか、なんで歳を知っているのよ!」

「いや、鑑定で分かるでしょ!」

「勝手にレディーの秘密を見たのね! ま、まさか、スリーサイズまで!?」

えええっ、鑑定でスリーサイズ分かるの? ……いや、そんなわけあるかあ!

「それはさすがにネタだよな? スリーサイズは鑑定で分からないし!」

「スリーサイズっていう概念を知っているってことは……あなた転生者ね!」

びしっとポーズを決めつつ指差してきたけど、別に隠していないんだよな。

「うん、転生者だけ……!」

あっさり認めると、呆れたようにハルが溜息を吐く。

「そこは「なんで分かったんですか!」とか、「バレてしまったら仕方がない!」とか、

お決まりのセリフを返すところじゃないの?」

そんなこと言われても……。

想像以上に面倒臭い奴だ。

そう思っていると、ハルが半眼を向けてくる。

「今、面倒臭い奴だと思ったでしょ?」

「思っているけど……?」

『私の扱いが酷い！ 転生者に会ったのは久しぶりなのよ！ もう少し優しくしてくれてもいいじゃないの！』

おお、ビクシードラゴンも頬を膨らませることが出来るんだな。

そう感心はするが、地球由来の面倒臭い反応に付き合うのにも段々疲れてきた。

まあ、どうしてもハルに話を聞きたくなったらまた会いに来ればいいし、今日は帰ってもらうか。

『うーん、色々聞きたいことはあるけど、これからやらなければならないこともあるし、また今度ゆっくり森に遊びに来るよ』

『それなら、しばらくはあなたについて行ってあげるわ。色々教えてあげるから、三食昼寝付きで手を打って——』

俺はハルの言葉を遮るように、勢いよく頭を下げる。

『ごめん！ 無理！』

ただでさえ俺は今、家に居場所がないのだ。

もうこれ以上、厄介者を抱えたくない！

そんなわけでお断りさせていただこうと思ったのだが、ハルは不機嫌そうだ。

『少しくらい考えてくれてもいいじゃない！』

プリプリ怒るハルを少し可愛いと思ってしまうが、それはダメだ。

なぜなら——

『希少なビクシードラゴンを連れて、町に戻れるわけないだろ？』

『ふふふつ、それは問題ないわよ。これでどうかしら？』

ハルは腰に手を当てポーズを決めている。

え、何も変わっていないけど？

俺は首を傾げてハルに聞く。

『えーと、それは何をしているのかな？』

ハルは、驚きの表情を浮かべる。

『わ、私のこと見えてるの？ 嘘でしょ!?!』

『えっ、見えているけど……?』

俺の言葉を聞いて、ハルはソファに突っ伏して、小さな拳を叩きつける。

『わ、私の姿隠しスキルが看破されるなんて……』

ああ、鑑定したときに、そんなスキル名が書いてあったな。

『ビクシー』という名が付くぐらいだから、そういったスキルを持っていても不思議じゃないか。

俺には効果がなかったわけだが。

ソファでうな垂れているハルの肩に手を置いて、励ましてやる。

『気に入るな。俺はレベルが高いから効かなかっただけだよ』  
『そ、そうよね。あんた転生者だもんね。仕方ないわよね！ タケル達にも私のスキルは通じなかったし』

ハルはそこで言葉を切り、仕切り直すように咳払いして、言う。

『そんなわけで、私は姿隠しスキルを持っているから、転生者以外には気付かれないわ。一緒についていっても問題ないはずよ』

『ごめんなさい！』

『がーん！』

いま普通に『がーん！』って言った？ 地球にもそんな奴いねえよ。

『なんでよ？』

食い下がつてくるハルに、俺は後ずさりしながら答える。

『ハルとは、たまーに会うぐらいが、ちょうど良いかな』

するとハルは突然俺に突進し、抱きついてきた。

そして俺の胸に顔を擦り付けながら訴えてくる。

『なんでも教えてあげるしなんでもするから、一日一回プリンを食べさせてほしいの！』

テンマー！ お願ひよおおおお!!』

今気付いたが、ハルはドロテアさんに似ている。

危険な臭いがブンブンだ。

それに……ハルは絶妙に大きすぎて、可愛くない！

たまに仕草が可愛いと思いたいそうになるが、それは幻想だ！

というわけで、もう関わるのはやめよう。

『じゃあ素材採取があるので、俺は行くよ。ハルも元気でね』

『チツ』

ハルは舌打ちして、胸元から離れた。

演技だったのか……。

『仕方ないわね。でも、たまには遊びに来なさいよ！』

はい、用事があるとき以外は来ません。

心の中で、そう返事をする俺だった。

ハルと一緒にルームを出た。

すると、ハルは優しい口調で言う。

『気を付けて帰んなさいよ。帰りに怪我したり死んだりしたら嫌だからね』

心底心配しているふうだが、先ほどの舌打ちを忘れる俺ではない。

どうせ好感度を稼いで、プリンを作ってもらおうって腹だろう。

## 立ち読みサンプル はここまで

……つていうか死ぬとか縁起の悪いことを言うんじゃない！  
『ハルも元気でな。体には気を付けてくれよ』  
ふふふつ、俺も少しずつ成長しているなあ。  
気持ちとは裏腹に、慈愛の表情を自然に出せた。

こうして俺はハルと別れた。

ようやく一人になったので、フライでロンダに戻るついでに素材を探す。  
少しして、グレートボアを三頭発見した。

『グレートボアを使えば、極上のとんかつが作れると思うわよ』

『そうだなあ、三頭も狩れば、しばらくはボア肉に困らない』

……つてちよつと待て。

なぜハルは俺の隣で、涎を垂らしている。

『ハルさんや』

『何かな？ テンマさんや』

『なぜ一緒にいるのかな？』

『念話で意思疎通出来るし、プリンも作れる。そんな相手を逃すなんて、あり得ないでしょ』

ハルは得意気な顔でそう言つてのけた。  
俺は半眼を向ける。

『プリンを作るけど、ハルに食べさせる理由はないよね？』

『それがあるのよ。私はカカオやコーヒー、そしてバナラを収穫出来る場所を知っているのよ。ああ、それに胡椒などの香辛料もね。それ以外にも、テンマが欲しがりそうな食材がある場所に關する知識だって持っていると思うわ。たぶんテンマがイチから見つけようとしたら、何年もかかるでしょうね』

思わず黙つてしまふ。

そ、その情報は欲しいなあー！

たぶん、勇者と一緒に見つけ出した食材に關する情報なのだろう。

ラインナップを聞くに、彼はきつと俺と同じ世界か、似た世界から来たんだろうな。

俺は交渉に入る。

『……プリンを毎日食べさせるのは無理だ。五日に一回が妥当だろう』

『さすがにそれじゃあ少なすぎるわよ。そうね……最低でも、二日に一回は出してちょうだい』

『じゃあプリンは五日に一回出す。それに加えて五日に一回、他のデザートも出すつていうのはどうだ？』